

## 「ペトロの最初の説教」 (使徒二・一二二～一二三、一二一～一二三、二二六～二二九)

### 1 教会の誕生

今日は聖霊降臨日、ペンテコステです。イエスの復活から数えて五〇日目（ペンテコステは五〇日目の意味）、またイエスの昇天から一〇日目に起こった、聖霊が降る出来事を記念する日です。

今日の聖書箇所は、聖霊が降り、使徒たちが語り出す中、それがまだ終わらないうちに始められたペトロの説教です。

聖霊降臨日は教会の祝祭日の一つです。クリスマスやイースターほど、一般には知られていませんけれど、キリスト教会にとっては、こちらのほうがむしろ大切かも知れない、祝祭日です。簡単にいえば教会の誕生日といってもよいと思います。教会とは何か、何をするところか、その原点に返って自分を知るために教会にとっては大切な、特別な日だと考えています。

復活から数えて五〇日目といいましたが、この間の出来事を振り返ってみると、こうです。

イエスは、復活したあと、四〇日のあいだ、ご自身が生きていることを数々の証拠をもって弟子たちに示されます。復活したイエスが現れたという意味で復活者の顕現ともいわれます。これらの日々、この四〇日は、まことに特別な時間、ほかにない時間、奇跡的な時間といわざるをえないと思います。復活したイエスが弟子たちと共に過ごす中で、抽象的な言い方を許していただけ、永遠が時間の中に存在し続けたのです。

この間に起こったことは、聖書には、じつは思いのほか多く語られています。それらはみな弟子たちの驚きや喜びを証しているようにも思います。

さてその四〇日が過ぎようとするとき、イエスは、最後に、弟子たちに、言い残して、天に上げられます。そうした機会に語られたもつとも重要な言葉は、伝道命令・派遣命令です。

あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる（マタイ二八章一九節）。

これはしばしば大伝道命令といわれます。この言葉が、その後の教会の歩みを決定づけたといつてよいのです。

さらに使徒言行録一章に伝えられている、オリブ山から天に上げられるさいに語られたイエスの言葉はこうです。

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして・・・地の果

てに至るまで、わたしの証人となる（一章八節）。

マタイの大いなる伝道命令も、使徒言行録のこの聖霊の約束の言葉も、教会とはキリストを証しする証人の群れ、そのような群れとして全世界に赴き、地の果てまで至る、そうした活動の中にある存在であることが明らかにされています。それを導き支えるのが聖霊、神の力なのです。

福音書や使徒言行録にこうして伝えられている、つい先頃天に上げられたイエスの言葉を反芻しながら、使徒たちと一二〇人ばかりの、最初の教会を形成することになる人たちが（その中にもイエスの母マリアも、兄弟たちも入っていたわけですが）集まっていたとき聖霊が降るといふ出来事は起こったのです。使徒言行録第二章のはじめの部分に伝えられています。

それはまことに不思議な出来事でした。突然、激しい風の吹く音が聞こえたと思ったら、炎のような舌が分かれ分かれに現れて、一人一人の上にとどまった。すると一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出したということです（二章一〜四節）。

聖霊を受けた結果、一同が、ふだん使っている彼らの言葉ではなく、「ほかの国々の言葉で」語り出したというのが、まずもって驚きですが、それ以上にここで重要なことは、その彼らの語る言葉が、そこに集まってきた人々、ユダヤ人をはじめ、世界の国から祭りにきていた人の心に届いた、「神の偉大な業を語っている」（一一節）言葉として聞こえたことです。不思議というより、本当に素晴らしいことといったほうがよいのかも知れませんが、その語りが、あるいはその行いが福音を伝達する、伝達することを許される、そうした群れ、人間が神のことを語る、証しする群れ、教会はここに誕生したのです。

## 2 キリストとしてのイエス

ペトロの説教は、先ほど申し上げたように 聖霊が降り、使徒たちをはじめみな語り出す中、それがまだ終わらないうちになされます。その意味ではペンテコステの一部です。教会の最初の説教と違ってよいと思います。その意味でも関心をもたざるをえない。初代教会の説教と、今日の私どもの説教、もちろん単純に比べることはできないけれど、やはりつながっていないなければならない。そう思うので、関心をもたざるをえないのです。

今回この箇所の説教を準備する中で、いろいろのことを、一人の説教者としても感じましたけれど、改めて強く印象づけられたのは、当たり前といえば当たり前のことだけれど、説教とはイエス・キリストを紹介することだ、別な言い方をすれば、イエスを救い主として語ること、つまりメシアとして、キリストとして語ることだということです。今日は、二章一四から始まっているペトロの長い説教、三箇所だけ読むだけに過ぎませんが、イエスを救い主として語るその筋道は、それらを連続して読むだけでも明らかです。

さてユダヤ人たちが、イエスを、まさにこのエルサレムの地で十字架につけて殺したのはつい一ヶ月半前のことです。ユダヤ人の、少なくとも民衆は、ペトロの説教の直後の反応などを見ても、罪の意識にさいなまれていたようです（「わたしたちはどうしたらよいのですか」三七節）。じっさいペトロも、次のように述べて、彼らの犯した罪を鋭く問うことをしていました。

イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。・・・このイエスを・・・あなた方は律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです（二二～二三節）。

もしこの事態、イエスが彼らによって殺されたままであったとしたら、彼らの罪は、どこまでも、たとえ彼らが忘れても、知らないと言いつづけても、残りつづけたはずです。

創世記に、アダムとエバの子、カインとアベルの兄弟のあいだで起こった弟殺しのことが書いてあります（四・一以下）。「弟アベルはどこにいるか」と神に問われてカインは、知らない、わたしは弟の番人ではない、などと答えます。すると神は「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる」といっています。罪というのは、人が意識する、その範囲にあるものではありません。罪は己を忘れないのです。それはきよめられなければならない。贖われなければならないのです。

イエスを十字架につけたユダヤ人たちの罪は、それならどのようにして贖われるのでしょうか。それとも贖われず、残りつづける、その犯した罪に、いわば呪われつづけるのでしょうか。

そうではない。神はこの彼らの罪を贖ってくださったのです。そのしるしがイエスの復活です（三二節）。十字架を自らに背負ったイエスの歩みは、神によって受け入れられ、肯定された。その十字架によってすべての人の罪が贖われたことを神は復活によって明らかに示されたのです。その罪の贖いはイエスを十字架につけた当のユダヤ人たちの罪の赦しも含みます。罪は罪としてあっても、贖われた。たとえ傷跡はあっても、すでに癒やされている。十字架の死と復活、そこにすべての人の救いが成就した。それが新しい事態、現実です。

### 3 すべての人の主の招き

それゆえペトロは、説教の終わりでこういいます。

だから、イスラエルの全家は、はつきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです（三六節）。

「はつきり知らなければならぬ」。この「はつきり」がここでは強調されています。イエスの十字架の全家だけでなく、私どもも「はつきり知らなければならぬ」のはイエスの十字架の死と復活によって、すでに人間の罪はあがなわれた、罪の赦しこそが私どもの生きる現実だということです。それは、いま申し上げたように、イエスを十字架につけた者たちの罪の赦しも含まれる。彼らも、いな彼らこそ、イエスの贖いと赦しの外にいないのです。

今日の私の隠れた問いは、今日の教会の説教と、キリスト教会の最初の説教とはつながっているのだろうか。どこで、どんなふうにつながっているのだろうかというものでした。簡単にいえば、私どもがイエスをキリストとして、救い主として語りつづけるなら、初代教会と今日の教会は同じ線の上にあると行ってよいのです。

今日の聖書箇所から、私どもが知っておかなければならないもう一つのことがあります。ペトロの説教、その宣教によって何が起こったかということです。

人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(三七〇-三八節)。

教会の言葉が神の業を証しする言葉として人々に聞かれた、つまり証しと宣教を務めとする教会が誕生した、この聖霊降臨の出来事に引き続いて起こったことは、悔い改めて、洗礼を受け、新しく歩み始める人たちが起こされたということです。その意味でここに教会は真実に誕生し、歩みはじめたのです。

最後に改めて確認しておきたいのは、この罪の赦しの福音はすべての人に開かれている、提供されているということです。

この約束はあなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです(三九節)。

「あなたがたにも」です。イエスを十字架につけたユダヤ人にもです。しかし彼らだけでない。神が招いてくださるすべての人です。「遠くにいるすべての人」は異邦人伝道のことを示唆しているのでしょうか。いずれにせよ、神はすべての人を招いています。神の側にもし心配というのがあるとしたら、私どもが、誤って、自分は招かれていないと思うことだけです。すべての人が救いに招かれています。イエス・キリストにおいて神は私どもすべてを招いているのです。

(二〇一九年六月九日 聖霊降臨日)